



Vol.57

机の上の小さな変革



便利の不在

こんにちは、菅俊一です。今回は「便利とは何か」ということについて考えていきたいと思います。いま、みなさんの手元にスマートフォンはありますか？ 個人で使っているスマートフォンを1日だけ、とにかく持ち歩くことなく過ごすことを実践してみてください。



では、明日1日だけスマートフォンを持ち歩かないようにしてみましょう。おそらくほとんどの人が、いきなり「はい、大丈夫です」ということにはならないと思います。本当にスマートフォンを持ち歩かないことを実践してみようとすると、時間を常に知るための腕時計、交通系ICカードやクレジットカードなどが入った財布を持ち歩くようにし、さらに場合によっては明日のスケジュールの詳細や時刻表、目的地への地図を紙に出力することもあるでしょう。また、買い物をするにしても実際に店に足を運ぶ必要があるので、スケジュール自体を再検討しておくなど、いろいろ事前に準備をする必要を考えるのではないかと思います。

そして、おそらくそのような準備の作業をするなかで、みなさんの心のなかには「めんどくさい」という気持ちが沸き起こってくるのではないかと思います。

利便性を獲得する前の感覚を記録する

ただ、スマートフォンを使う前、もしくは登場以前に人々が日常的にこれらの行為について「めんどくさい」という気持ちを抱いていたかということそんなことはなく、当たり前のように行なっていたことでもあります。

つまり、スマートフォンは「1つのデバイスにさまざまな機能を集約させる」「リアルタイムにその場で必要な情報を取得できる」という2つのことを実現しているわけですが、それらを体験した結果、私たちが機能の集約やリアルタイムの情報を取得できることを「便利」と感じるようになったのだと事後的に評価しているだけなのかもしれません。

私たちにとって「便利」という感覚はとても厄介で、これまで不便に感じていなかったことを不便に感じさせてしまうことによって生み出されている側面があります。現在もさまざまな技術や道具が私たちの前に次々と登場して生活のなかに入り込んでくるわけですが、これらの技術が登場する前に抱いていた気持ちをきちんと記録しておいて忘れずにいることが、事後の感覚に影響されずに物事の本質を見ていくうえでは重要になるかもしれません。



PROFILE 菅 俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンデコノミクス』など。